

—東京ユニバーサル・フィルハーモニー管弦楽団（以下ユニ・フィル）の歴史についてお話し下さい。  
 三石 ユニ・フィルは以前、日本新交響楽団という名前で、東京音楽事業センターがマネージして、主に音楽鑑賞教室やオペラの仕事を25年間やってきた。その仕事を僕も時々手伝っていました。1997年にそのオーナードラ、「定期演奏会をおこなって、メジャー・オーケストラの仲間入りをした」ということで、このとき、「東京ユニバーサル・フィルハーモニー管弦楽団」という名称を、僕が命名しました。このユニバーサルという言葉には最大級の大きさを表現する宇宙という意味の他に、いろいろなことを包括するという内容も含んでいるので、一番適切な名称だと思ったわけです。それでスタートしたのですが、2007年の10周年を迎える前年に、オーナーから「累積赤字がたまって、これ以上定期はできない」と言われまして。そこで、2007年から僕が中心になって赤字部門の定期演奏会だけを引き受けましたが、賛助会員の会費と

チケットの売り上げだけでまかなって、今年2回しか定期ができない状態です。  
 —ユニ・フィルの特徴は？  
 三石 変幻自在で、集中度が高く、緻密なアンサンブルができます。  
 —今回の定期の曲目と聞きどころをお話ください。  
 三石 ユニ・フィルの合唱団と共に、没後二百年記念となるハイドンのオラトリオの『四季』を演奏します。  
 ハイドンやメンデルスゾーンは19世紀後半から20世紀前半頃までは、あまり好まれなかった。というのは、この時代の指揮の巨匠たちが重たい厚い音で演奏することが多かったからでしょう。ハイドンもメンデルスゾーンも軽快で明るく、健康的な音楽なのでそういうところを強調したい。春の定期では、メンデルスゾーンを、ドイツ語でいうシュランク（Schrank）、つまりスリムな音で演奏しました。これだと速いパッセージでもきれいに聞こえます。ハイドンもシュランクで演奏して、健康的な躍動感や明るさを強調して、スピード感あるハイドンを楽

しんでもらおうと思います。  
 —演奏で難しいところは？  
 三石 ドイツ語の歌詞が早口も多く、とても難しく、合唱が大変です。だから、言葉の練習を徹しく指導しています。  
 —長い曲ですね。  
 三石 はい。あまり演奏されませんし、僕も38年くらい前に一度やっただけ。この台本をつくったのはスウィーテン男爵で、ハイドンもけちをつけるわけにはいかなかったから長くなったのでしょう。今回はそれをちよつとも解消するために、「夏」のルーカスとハンネの愛のデュエットと、「冬」のシモンの内省的な歌をカットします。  
 —描写的などころも多いですね。  
 三石 蛙や牛や鳥の鳴き声、鉄砲の音、とハイドンは茶目っ気がありますね。  
 —他に特徴はありますか？  
 三石 この曲にはやたらとフーガが出てくるんです。それから、和声の展開が冒険的で大胆ですね。  
 —三石さんはチェンバロの弾き振りですね。  
 三石 ええ。実は僕はピアノニストになりました。子供の頃

三石精一=東京芸術大学指揮科卒業。1956年メロディ作曲歌劇「泥棒とオールドミス」電話の指揮でデビュー。59年にはプリテン作曲歌劇「小さな煙突掃除」、ラヴェル作曲歌劇「スペインの時」を初演するなど、当初は主にオペラ、バレエで活躍し、脚光を浴びる。77年文化庁芸術家在外研修員として派遣され、ウィーンフィルとミュンヘン国立歌劇場で研鑽を積み、78年に帰国。79年読売交響楽団専任指揮者に迎えられる。81年の同楽団ヨーロッパ公演では、東ベルリンなどで大成功を収める。86年退団後、全国各地のオーケストラに客演して活躍する一方、東京音楽大学指揮科主任教授として後進の指導にあたり、2002年同大学名誉教授となる。97年東京ユニバーサル・フィルハーモニー管弦楽団音楽監督・常任指揮者に就任する。社団法人青少年音楽協会会長、日本指揮者協会顧問。

没後200年記念でハイドン『四季』を公演

Seiichi Mitsuishi  
 三石精一 (指揮者)

『四季』はとっても  
 楽しい音楽です

訊き手=菅野泰彦

からピアノが大好きでした。戦争中で疎開させられたときはもう弾きたくて弾きたくて。東京に帰ってから、中学を一年間休学する、と親に宣言して、朝から晩までピアノを10時間ぐらいい弾いていました。もう、絶対調だったですよ。  
 —ご両親も音楽を？  
 三石 親父は物理学者でしたが、ヴァイオリンとかホルンとかピアノができて、母親はピアノを弾いた。親父がヴァイオリンで、母親が伴奏したり、親父の友達の学者連中がしょっちゅう家に来て、弦楽四重奏をやっていた。それから、親父はオペラ好きで、中学の頃、よくオペラに連れていってくれた。最初に見たのは東宝専属の時代の藤原歌劇団で、『タンホイザー』の日本初演で、同じものを6回ぐらい見ましたね。

それでピアノですが、薬指が腫鞘炎になって、プロのピアニストはだめだ、と思った。で、藝大を作曲で受けるしかないと思い、作曲を習いに行きました。受験の半年前に藝大の指揮の金子登先生を訪ねたら、「作曲じゃ食えない。指揮をやらないさい」と言われ、半

年ぐらいレッスンしてもらいました。ところが、指揮のレッスンははずでしたが、ピアノばかり弾かされた。毎回、バッハの平均律の前奏曲とフーガを2曲ずつ暗譜してこい、と言われ、他には合唱曲、弦楽四重奏曲、簡単なオーケストラの曲をピアノで弾かされました。受験の一ヶ月ほど前に、「こんな具合に振ればいいんじゃないの」と教えてもらった。入学試験は、ピアノはピアノ科と同程度、作曲は作曲科と同程度できることが条件で、ここを合格しないと指揮の試験に進めない。僕が入ったのは藝大に指揮科ができて3年目でしたが、一人も受かった人がいなかった。その年も僕だけが入っちゃった。  
 —日本の音楽家に必要なことは何でしょう。  
 三石 日本の音楽家は譜面を正確に音にすることが基本で、完璧に弾くんだけれど、おもしろくない演奏がひじょうに多い。作曲家や曲の成立など、すべて知って、譜面の奥の作曲家の心を探り出すことが演奏家にとって一番必要だと思います。

—コンサートに向けてメッセージ  
 三石 日本は楽譜が正確に音にすることが基本で、完璧に弾くんだけれど、おもしろくない演奏がひじょうに多い。作曲家や曲の成立など、すべて知って、譜面の奥の作曲家の心を探り出すことが演奏家にとって一番必要だと思います。

ハイドン没後200年記念 オラトリオ『四季』  
 東京ユニバーサル・フィルハーモニー管弦楽団  
 第26回定期演奏会

▶12月5日(土) 14時、東京芸術劇場大ホール  
 指揮・チェンバロ：三石精一  
 ソプラノ：佐々木典子 テノール：経種廉彦 パス：久保和範  
 管弦楽：東京ユニバーサル・フィルハーモニー管弦楽団  
 合唱：東京ユニバーサル・フィルハーモニー混声合唱団  
 (合唱指導：北川博夫)  
 ▶ユニフィルチケットセンター 03-3974-6557

